

| | | | |
|------------|---|--------|---|
| 秋 | 田 | 大 | 学 |
| 教養基礎教育研究年報 | | | |
| 17 — 24 | | (2002) | |

大学教養教育における「英語 Writing」の位置

佐藤 暢 雄

A Status of Writing in General Education

Nobuo SATO

Abstract: Learning to write logical and refined English, preeminently the most international of languages, is an essential element of higher education as well as communication. This paper attempts to integrate functional and rhetorical perspectives into "writing" teaching programs and materials. These perspectives, elucidating the relationships between possible sentences and the choices between semantically equivalent sentences, give us explicit insights on the practical principles of logicity, clarity and conciseness in writing matured English. Acquisition and application of these principles through the study of language as an intellectual exercise contribute not only to the systematic improvement of our writing but also to our students' appropriate preparation for academic course of study, especially in their writing of a research paper integrating and documenting information from secondary sources.

1. はじめに

1991年の「大学設置基準の大綱化」により、本学においても1998年に「総合基礎教育」から「教養基礎教育」への改革が行われ、外国語履修基準は（一部を除き）6単位にするとともに、英語 Writing と Listening 各2単位を必修とした。この変更は、担当教員定員増が全く見込めない中で、それまでの過大 class の解消など教育環境の整備と、訳読中心の恣意的な英語教育から英語表現力の伸長を目指すという教育内容・方法の改善を行うためであった。以後4年経過する中で改善されてきた点も少なくないことは、例えば syllabus の記載内容の変遷においてもうかがわれる。しかし、急速かつ広範囲に進む globalization および高度情報化社会において求められる英語による高度な表現能力と、学生の総体的到達度との間には、依然として大きな乖離が見られることも確かである。

この乖離を効果的に埋めていくためには、大学入学後、英語学習に積極的な目標を見出せないでいる多くの学生の学習意欲を高め、国際的な視野に立って英語の表現力を高めることの必要性を意識させなければならない。そのためには、writing 教育においても、日常的な内容短文の和文英訳に留まることなく、学生の知的好奇心を触発し、各専門領域の学習にも結びつく論理的思考力・表現力を高める言語教育を展開していくことが重要である。このような EAP (English for Academic Purposes) の一環としてこの4年間展開してきている英語 Writing 教育の教養教育における意義と位置づけについて、論理的英文構成法を中心として、以下に述べる。

2. Writing と Translating

言葉による表現は「話す」と「書く」ことに大別されるが、両者の間には、次のような基本的相異がある。「話す」場合には、場面情報が意味を補い、通常は相手が目の前に実在することにより、相手の理解の度合や反応を確認しながら話を進めていくことができるのに対し、「書く」場合、読み手は時間・空間的に離れており、書き手はさまざまな状況において読まれ、解釈されることによって生じる問題を前以って考えなければならない。また、「話す」ことにおいては、十分に準備する機会が少なく、考えながら話す場合が多く、また、使われる音声も瞬間的に消えていくため、複雑な思考内容を整理した上で表現することが難しい。一方、書かれた文章は、永続的であり、読み直したり詳しく分析したりすることができるため、書き手には注意深い構成と精巧に組み立てられた表現が求められる。

頭の中に浮かぶ複雑な思考内容を確認しようとするとき、通常われわれは、文章化し、推敲を重ねながらその文章を修正していく。つまり、思考内容を論理的に纏め上げることが「書くこと」の中心過程であり、整った文章を構成するには高度の知的活動が必要である。言い換えると、書かれた文章は、提示された段階で、その意味はすでに明確になっていなければならない、そのために前提となるのが「内容および形式における概念の明確化」(conceptualization)である。

この「概念の明確化」という知的活動は、使用言語における「表現のしくみ」を十分に踏まえないと、したがって、外国語による表現が求められる場合には、そのしくみの相異に由来する困難さが伴う。英語と日本語は、言語類型論からみても、語彙形成・統語形式において大きく異なっており、基本的な内容を正確に表現することさえ容易ではない。例えば、(1)「この部屋のエアコンは強すぎる」(2)「部屋中、鍵を探したが、鍵はなかった」(3)「とうとう、ついに」を多くの学生は次のような英文で表す。

(1) The air-con in this room is too strong.

(2) I searched the key in my pockets, but no key.

(3) The doctor treated the patient for many weeks, but at last the patient died.

このようなカタカナ語、形容詞・動詞、つなぎ語など語彙・統語に関する誤用は、中学校以来学習してきたはずの基本的な事項の誤りとともに、枚挙にいとまがない。この「短文の和文英訳」は、大規模クラスにおいての一斉授業でも事後処理をし易いという利点も手伝って、日本の伝統的英語教育においては主流となり、現在も根強く続いている。しかし、日本語の短文を英訳するということは、他人から与えられた内容を文法と語彙の知識を基にして「訳すこと」(translating)であって、自分の考えを「書くこと」(writing)とは、質的に異なる活動である。また、formalな使用域(register)で求められる「洗練された(refined)文章」は、単に文法的に正しい文の集合に留まるものではない。

「ある纏まりのある formal な英語文章を適確に書く」にはそれなりの構成と展開法があり、その手法の一つに paragraph writing がある。欧米の古典的かつ近代的修辞学(rhetoric = the art of study of using language effectively and persuasively)にその基盤をもつこの手法は、文構造を微視的に捉える前に巨視的に捉えようとする点で、paragraph reading 表裏一体の関係にあり、最近ようやく日本の writing 教育にこの手法が採り入れられてきている。

3. 「論理的な文章」

それぞれの文化には固有の表現・論理形式があり、文法的に正確な文を連ねてもそれだけで論理的な文章になるわけではない。現在国際社会の主流となっている欧米型の「論理的表現」

は、帰納法や演繹法のような論理的証明に用いられてきた西欧の「論理的思考法」に基づく表現である。したがって、国際社会で英語による効果的な発信をしていくためには、この欧米型の論理的表現の原理を踏まえることが必要になる。その原理は、基本的に、次の3条件に集約される。

- ① 主張内容が、文章全体を通して首尾一貫 (coherence) して円滑に表現されていること。
- ② 語と語、文と文、段落 (paragraph) と段落の各関係が明晰 (clarity) に、理解し易く表現されていること。
- ③ 冗長さ (redundancy) が小さくなるよう、簡潔に表現されていること。

これらの原則の網羅的な具体例を、次の Leech, G. *et al.* (1982:185) からの引用文で確かめてみよう。

[Text A] John Keats was fascinated by the art and literature of the ancient world. Just before his twenty-first birthday, he read George Chapman's translation of Homer. He wrote a famous sonnet on the subject. The next year, he visited the Elgin Marbles. The painter Benjamin Haydon accompanied him. This developed his enthusiasm still further. He wrote another notable sonnet after the visit. But his Greece was essentially a Greece of the imagination. It was the Greece of John Lempriere's *Classical Dictionary*. He had read this when he was young. He never visited Greece.

この文章は11の短文の羅列で、平板で単調な未成熟な表現である。短文による表現の理解し易さはあるが、文と文との間のつながりに唐突さが見られ、流れの一貫性は不十分である。

[Text B] Although John Keats had been fascinated by the art and literature of the ancient world ever since he read George Chapman's translation of Homer (which produced a famous sonnet on the subject) just before his twenty-first birthday in October 1816, and had that enthusiasm further developed by his visit to the Elgin Marbles with the painter Benjamin Haydon the following year (which also produced a notable sonnet), his Greece was essentially a Greece of the imagination, inspired by his early reading of John Lempriere's *Classical Dictionary*: he never visited Greece.

この文章は僅か一つの文で構成され、一読しただけでは理解しにくくなっている。理解を妨げているのは従属節の多用であり、文を単純に長く複雑にすれば成熟した文章になるわけではなく、むしろ論理が不明確な文章になることが示されている。総語数も90で、冗長度も [Text A] とほぼ同じである。

[Text C] Although John Keats was fascinated by the art and literature of the ancient world, he never visited Greece. His Greece was essentially a Greece of the imagination, inspired by his early reading of John Lempriere's *Classical Dictionary*. Just before his twenty-first birthday, he read George Chapman's translation of Homer, an experience which inspired one of his most famous sonnets. His enthusiasm was further developed, in the following year, by a visit to the Elgin Marbles with the painter Benjamin Haydon.

この文章は上記二つの Text の欠陥を補い、熟度の高い表現になっている。それは、この文章を構成している4文がいずれも適度な長さであるとともに、適確な従属節で修飾されていること、一貫性のある論理の流れが明確に表されているためである。総語数80は、論理的・明晰な表現にすれば簡潔性も高まる可能性を示している。

4. 「簡潔さ」と「明晰さ」

論理的な文章構成力を体系的に培うためには、明晰かつ簡潔な表現にするための英語のしくみについて習熟させることが肝要であり、writing 教育においてはその演習を中心にしている。各回の授業においては、brainstorming としてあるいは課題に基づいて、常識水準の客観的事項や topic につき、その定義あるいは説明として書き表すべき内容を整理し、その内容を英語の短文で列挙させる。その過程で、入学までに習得しているはずの（語形変化・数の一致など）基本文の正確な表現法も確認する。例えば、"elephant" についての定義を求めると、次のような短文群が集まる。

(4) An elephant is the largest animal which is living on land.

It has four feet, two long curved teeth, and a long nose.

It can pick up things with the nose.

羅列されたこれらの短文群そのままでは、語彙の選択に不十分さが残り、余剰性も多く、稚拙な表現であるため、簡潔かつ明晰な一つの文に纏める文接合 (sentence-combining) を行う。これらの短文を関係詞を多用して単純に一文にすると、依然として余剰性が残る (5) のような表現になる。そのため、さらに簡潔な表現を目指し、関係詞に関わる適切な用法を説明しつつ、期待させる (6) の表現に集約していく。

(5) An elephant is the largest animal which is living on land and which has four feet, two long curved teeth, and a long nose, which it can pick up things with.

(6) An elephant is the largest four-footed animal living on land with two long curved tusks and a long trunk with which it can pick up things.

ここで用いられている関係詞に関わる英語のしくみは、formal な文体においては共通に活用される次のような統語上の原則である。

- ① [関係詞+be] は、分詞句、形容詞句、前置詞句が後続する場合、一般に削除可能。
- ② [関係詞+have] は、前置詞 with あるいは形容詞的表現に換えられることが多い。
- ③ 関係詞節の末尾に前置詞を残す表現は、口語体であり、formal な文章に用いることは望ましくない。

簡潔性を高めるための英語のしくみとしては、関係詞に限らず、省略現象を基本として、分詞構文、不定詞・動名詞構文、名詞化形 (nominalization)、代用表現など広い範囲にわたる。文接合による sentence-revising においては、これら統語上のしくみとともに、次のような余剰的部分の削除や修正も discussion の対象にし、表現しようとする概念の明確化を促す機会にしている。

(7) a. Because of the El Niño current, many fish were killed.

→ b. El Niño current killed many fish.

(8) a. An electric current is being passed through a wire. The current is quite high, and the wire is getting very hot. The wire will probably melt soon.

→ b. The wire is likely to melt unless the current is reduced.

(9) a. In fact, the television station which was situated in the local area had won a great many awards as a result of its having been involved in the coverage of all kinds of controversial issues.

→ b. The local television station had won many awards for its coverage of controversial issues.

縮約 (reduction) の機能は、余剰性を少なくするとともに、読み手の意識を伝達しようと

する情報に集中させることにある。しかし、過剰な縮約は、その表現の不明確さや、時には常識を疑わせるような誤解をもたらす。英語においてとくに多く見受けられるのは、懸垂分詞 (dangling participle)、袋小路文 ('garden-path' sentence)、非論理的省略であり、次の各例文 (a) は、それぞれ (b) に改める必要がある。また、(13) のような、指示対象が不明確な代名詞の使用も避けなければならない。

- (10) a. *Located near the stomach, the patient felt nauseated with the tumor.
 b. The tumor being located neat the stomach, the patient felt nauseated.
- (11) a. *George proved the theorem Mike had assumed to be true was false.
 b. George proved that the theorem Mike had assumed to be true was false.
- (12) a. *Greek ruins are as interesting, if not more interesting than, Roman ruins.
 b. Greek ruins are as interesting as, if not more interesting than, Roman ruins.
- (13) When the driver accidentally backed the car into the toolshed, it was wrecked beyond repair.

このように、簡潔さと明確さ是对立する性質をもつ原則であり、実際の表現において両者の均衡をとることは容易なことではない。さらに、論理的で円滑な流れとなる文章を構成するためには、情報構造 (Information Structure) をも踏まえなければならない。

5. 情報構造に基づく表現

情報構造からみると、文は、基本的に、先行する文脈から既知の情報となる主題 (theme) に始まり、読み手に伝える新情報の焦点となる題述 (rheme) が後続する形で構成される。日英語いずれにおいても、ほぼ同じ意味内容を表すのにその構成要素の文内における位置が異なる文形式が数多く存在する。これらの形式は、この情報構造の基本に沿って、文章の理解を円滑に促進するために各言語が用意している統語上のしくみといえる。

文内の要素の移動現象の原理については、これまでの言語学とくに生成文法および機能文法が包括的に明らかにしている。左から右へ線状的に書き表される英文において、その要素の移動は必然的に左方 (文頭) と右方 (文末) のいずれかになり、概略、左方への移動はその要素を主題に据えるためであり (thematization)、右方への移動はその要素に情報上の焦点の位置を与える (focusing) ためであるといえる。以下、英語における要素の移動現象の代表的な例を示す。例文中の *t* (= trace) は、移動した要素 (下線部) が移動前に占めていた位置を表す。

A. 「左方移動」

- (14) This latter topic we have examined *t* in the previous chapter and need not consider.
- (15) What happened between the three of them during the night in the rooms upstairs nobody knows *t*.
- (16) On top of the pile the juggler placed a glass of water *t*.

上例において、文頭に移動した下線部の要素はそれぞれ名詞句、名詞節、副詞句であるが、先行文脈を推定すれば、これら主題を担う要素が元の位置から移動した必然性は明らかである。

B. 「右方移動」

この移動現象の典型は、長い要素したがって情報量の多い要素を文末の焦点の位置に据える (17) のような場合である。この例においては、長い要素である *that* 節自体も in 1960 を越えて、外置 (extraposition) により、後置されているが、情報量の多い下線部もその動詞の *object* の位置から焦点を与えられる位置に移動している。この右方移動の中には、名詞句の一部

を後置する (18) のような要素の分離 (extraction) も含まれる。

(17) Vitamins were first called 'accessory food factors' since it was discovered in 1960 that most food contain *t* besides carbohydrates, fats, minerals and water, these other substances necessary for health.

(18) A number of books *t* have been published on the history of American Negroes.

C. 「双方向移動」

be 動詞を中心とする「存在」を示す動詞を軸として、その前後の要素を回転させる。したがって、上記AとB双方の機能を同時に果たす移動現象である。文頭に移動する要素は以下のように前置詞句、分詞、比較表現が多い。

(19) Hope, the final gift, lay at the bottom of Pandora's box.

→ At the bottom of Pandora's box lay the final gift—hope.

(20) A second problem, which has so far not been discussed at all, is connected with this problem.

→ Connected with this problem is a second problem, with has so far not been discussed at all.

(21) The identical intensity of their expressions was more remarkable.

→ More remarkable was the identical intensity of their expressions.

このような情報構造に基づく文内の要素移動現象は、円滑に情報を伝達するために英語が備えている統語上のしくみであり、論理的な文章表現においてはとくに頻用される。応用の一つの例として、Singer, C. & E. A. Underwood (1962): *A Short History of Medicine* からの次の引用文について確かめてみよう。

(22) ^(a)In some ancient writings reference had been made to the association between rats and plague *t*. ^(b)In 1894 the plague bacillus was found on dead rats *t*. Most plague authorities, however, were still doubtful about the connection, because cases of plague often occurred in places where no rats could be found. Further, it was noted that while it was very dangerous ^(c)to handle an infected rat which had just died, this could be done with safety a few hours later. This led Paul Louis Simond (1858-1947) to put forward *t* in 1989 ^(d)the theory that the rat-flea is the intermediary which transmits the bacillus from the rat mechanically or otherwise. The actual method was not demonstrated until the experiments of Arthur William Bacot (1866-1922) and Sir Charles Martin (1866-1955) in 1914. What happens is that ^(e)the rat-flea, in feeding on the blood of an infected rat, takes into its alimentary system large numbers of plague bacilli. These lodge in the fore-stomach of the flea, and as the process continues this organ eventually becomes blocked by a solid mass of bacilli. Thereafter, whenever the flea attempts to feed, the blood cannot pass to the true stomach, and it is regurgitated into the puncture made by the flea's mouth-parts. ^(f)With the regurgitated blood go large numbers of bacilli, which are thus injected into the wound. If the flea is feeding on a healthy rat or man, they are thus infected.

上記の例における下線部 ^{(a)(b)(d)} は、それぞれ痕跡 *t* からの移動であり、下線部 ^(c) はその前の *it* の位置からの移動である。複雑な下線部 ^{(e)(f)} を移動前の無標 (unmarked) の語順で表せばそれぞれ次のようになる。

^(e) the rat-flea takes large numbers of plague bacilli into its alimentary system in feeding

on the blood of an infected rat.

- (c) Large numbers of bacilli, which are thus injected into the wound go with the regurgitated blood.

これらいわゆる「通常の」語順による表現と原文とを比較すれば、情報の円滑な流れの点で、原文の表現が望ましいことは明らかである。原文におけるこの円滑な流れは、それぞれの文が、先行文脈で与えられた既知情報で始まり、最も重要な情報を焦点の位置となる文末に移動させることによって実現されている。このような要素の適正な移動現象について理解を深めることは、日本語の発想・表現形式にとらわれず、英語の論理形式に従って文章を構成する場合のみならず、密度の濃い学術的な英語文章を正確に理解する場合にも欠かすことはできない素養である。

6. 「要約法」

講義・講演を聴く、Internetで情報を集める、論文・文献を読んでレポートを書く、いずれの場合も含めて、日常頻繁に、note-takingをし、summarizationすることが必要になる。Summaryは、"a presentation of the substance of a body of material in a condensed form or by reducing it to its main points" (*American Heritage Dictionary*)と定義されるように、原文で表されている個別的・具体的事項を捨象して、要点を抽出し、自らの表現で明確に言い換えることである。したがって、適確なsummaryを書くためには、原文を正確に理解した上で、簡潔・明晰・論理的という文章構成の原理を踏まえなければならない。

医科学情報学講座では、TIMEの主に医科学・医療に関する記事を題材として、日英語によるsummarizationの自習教材を開発し、授業の補完として使用している。計算機を活用したこの学習に学生の多くは興味をもって取り組んでいるが、「要約法」に馴染みが薄いため、答として提出される要約文の質量はさまざまである。このため、次のMacdonald & Mancondonald (1996:424) およびその他の例文を参考にしながら、英語による要約法の解説を行っている。しかし、それぞれの文章の「要約法」を一般化して系統化することは難しく、したがって、要約文の評価判定法の精度を高めることが最も重要な課題となっている。

[A] A rise in levels of education in the United States of the 1950's meant a rising appreciation of culture. During that period, more dollars were spent on concerts and on recordings of classical music than on baseball. Sales of books doubled from 1940 to 1950. The mid-Fifties boasted a thousand symphony orchestras, and several hundred museums; institutes and colleges began purchasing art and more students began to major in the humanities. Various other indexes can be cited to show the growth of a large middle brow society during that period, and steadily increasing productivity and leisure helped the United States become an even more active consumer of culture in the Sixties and Seventies. —V. L. Macdonald, "Consumer Culture"

Summarizationにおいては、key words, key sentencesを適確に捉えることが肝心である。一般に、paragraphにおけるkey sentenceはtopic sentenceで表され、topic sentenceはparagraphの初めに表されることが最も多いが、終わりに表されることもある。この原則に基づいて[A]の文章を要約すれば次の[B]のようになる。

[B] A rise in levels of education in the United States of the 1950's means a rising appreciation of culture, a huge middlebrow society of consumers that would continue to grow in the Sixties and Seventies.

しかし、この要約では原文の表現がほぼそのまま用いられており、「自らの表現で」という高度な本来求められる趣旨に沿うようにすれば、例えば、[C] のように表される。

[C] Because more Americans went on to higher levels of education in the Fifties than in the Forties, they began a trend toward being "consumers of culture" that changed Fifties' society and that continued into the Sixties and Seventies.

7. まとめ

知的内容に相応しい論理的な文章を書く場合、その文章を構成している各文が正確に表現されるとともに、明晰かつ簡潔にという情報伝達上の原理を踏まえなければならない。しかし、これらの原理に基づいて表現することは、母語による場合においても容易なことではなく、まして外国語による場合、この原理に関わるその言語の統語・論理上のしくみを意識的に習得しなければならない。英語のこれらのしくみについては、これまでの言語学とくに Generative Grammar, Functional Grammar, Rhetorical Grammar が体系的な知見を与えている。論理的な英文構成力を有機的に養成するためには、大学教養英語教育においても、これらの知見を活用し、各専門領域の英文構成に繋がる普遍的基礎部分の言語教育を体系的に進めることが重要である。

論理的な英文構成に必要な原理の理解・習得は、とくに学術的な内容表現に欠かすことのできない素養である。この原理を系統的に示すことによって、学習者は知的興味を高め、教室内の文修正においても、その習得の度合に応じ、活発に意見を述べるようになる。さらに、この原理に基づく paragraph writing の修行を積み重ねていくことは、writing の範囲に留まることなく、学習者が自分の専門の論文・文献を円滑に読みこなしていく力の養成に直接結びつくという効果も期待できる。

限られた授業時数で学生の学習意欲を高めていくためには、さらに、その教材として可能な限りそれぞれの専門領域で頻用される題材・例文を選択することが望ましい。その際、担当者がその内容を理解できる範囲に限ることは当然で、重要なことは、論理的な英文構成に求められる普遍的原理を習得させるのに相応しい教材を精選・提示することである。この原理を堅実に習得させることによって、教養教育としての「英語 writing」は、それぞれの専門教育における本格的な英文構成の指導に橋渡しをすることが可能となる。

[参考文献]

- Halliday, M. A. K. & J. R. Martin, 1993. *Writing Science* (London: The Falmer Press).
- Kolln, M. 1999. *Rhetorical Grammar* (Boston: Allyn and Bacon).
- Leech, G., Deuchar, M. & R. Hoogenraad, 1982. *English Grammar for Today* (London: The MacMillan Press).
- Lock, G. 1996. *Functional Grammar* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Macdonald, A. & G. Macdonald, 1996. *Mastering Writing Essentials* (New Jersey: Prentice Hall Regents).
- Stott, R. & P. Chapman (eds.), 2001. *Grammar and Writing* (London: Longman).
- _____, 2001. *Writing with Style* (London: Longman).
- Zeiger, M. 1991. *Essentials of Writing Biomedical Research Papers* (New York: McGraw-Hill).